

特集にあたって[†]

国分 正義*

1. 特集の思い

長江の源流を辿りたい。夢である。夢ではあるがそこはどんな所で、そこに何があるのか。青海省・チベット高原の一滴の滴り落ちる水滴が成長し、川から大河になり大地を潤す。動植物や人々の生活を支える命の流れとなってやがて東シナ海にそそぎ込む。その最初の一滴を見たい気持ちは誰にでもある。

あらゆる仕事の基幹要素である品質管理はこの命の流れである、といっても過言ではない。命の流れの源流・原点を知ることは、仕事への活用場面において重要である。品質管理を構成する各要素の源流・原点(ルーツ)を探り、開発者・提唱者の熱き思いを拾い上げて、発展のプロセスを辿り、そこにはどのような意図があり、また苦労があったのか、伝えたかった事はなにか、さらに現在はどうのように活用されているのかを見定めて、そこから将来の展望を予見する企画とした。

加えて、開発・提唱した先達者の思いを今の実践者である後輩に伝承し、品質管理の活性化に繋げたい。このことを品質管理界の第一人者をお願いしたところ、全員快く引き受けていただき、執筆の運びと相成った。

2. 特集テーマとその背景

品質管理の世界で普段われわれが目に見ている、あるいは活用しているシステム、概念・考え方、手法について、そもそもの始まりはどのようなものであった

[†]平成21年11月9日 受付

*つくば品質総合研究所

連絡先：〒300-0312 茨城県稲敷郡阿見町南平台2-5-2

のか、そして始まりに関係された方々の熱き思いは如何なるものであったのかを後世に引き継ぎ、新たな命の流れを創ることを願い、本特集テーマを『品質管理事始め(ルーツを探る)』とした。

品質管理の歴史の中では、ごくごく最近に開発された手法で、かつ原点が明確にわかっているものでさえ、「知っているようで実は知らない」ことがある。例えば、「新QC七つ道具」と命名し、七つを選定した先達者は誰(ら)で、それは何時で、どのような変遷を辿り現在に至ったのか。

QCサークルの誕生とその背景はとなると諸説混合の感がある。大会通し番号の「第1回大会」が何故仙台で催されたのかなど興味は尽きない。

また、品質管理を構成する各要素の解釈も各人各様で公に認められた定説として定着していないものも多い。「PDCA」の事始めは、「QCストーリー」の事始めは、「方針管理」と「機能別管理」は、など知的探求の興味は増すばかりである。と同時に時間の経過とともに風化と劣化が気になるところでもある。今のうちになんとかしたいというのが本企画の背景にある。

3. 本特集の特徴と構成

本企画の特徴としての基本的スタンスは、構成要素の原点(ルーツ)に徹底的にこだわり、ここに比重を置くとともに、個人ベースの視点ではなく、客観的視座で歴史の事実を掘り起こす作業を旨とした。執筆者個人の知識・知見に文献調査とその照合という並々ならぬプロセスを経て、本企画は成り立っている。

構成は、「過去」「現在」「未来」の3大話を基本に、さらにこの「過去」を2つに分解して「原点」・「発展のプロセス」とし4大話とした。

—基本構成—

- (1) 原点(開発・提唱・誕生のその時, その背景)
- (2) 発展のプロセス(障害の打破と苦労話・秘話など)
- (3) 成長の要因と現状(今起きていること)
- (4) 今後の展望(執筆者の熱き思いと後世への伝承)

上記4つの視点を基本構成としているが、取り上げる項目(品質管理の構成要素)によっては、この統一された流れではまともにくい場合もあり、あくまでも「基本的」構成とした。しかし、比重は(1)原点に置き、ここにこだわりとともに多くの紙面をとった。加えて、事実の積み上げによる客観性を基軸とした。それゆえ名実ともに第一人者といわれる先生方、実業界のオーソリティーの方々に、その執筆をお願いした。

資料調査・事実の確認・検証などは、本来であれば本編集委員会で行うものであるが、時間的制約から各執筆者に委ねた。大変なご苦労をお掛けいたしましたことにお詫び申し上げたい気持ちでいっぱいである。

(1) 原点では、開発者・提唱者などの大先達者の熱き思いを今一度掘り起こし、その再確認とともに「初めて」故の苦労話や、その時の時代背景・労働環境、その時の品質管理界の反応など、この原点に織り込む項目は執筆者の視点に依った。

原点(ルーツ)その時の「5W1H」、すなわち、誰(ら)が、いつ(頃)、どこで、何を、どのようにして、なぜ、の視点を入れることは非常に難しく、文献調査とともに時代考証・検証作業や照合に多くの時間と労力が掛かることが予想されたので、今回は「できうる限り」とした。そして、本企画を第1段の振り出しとして読者諸氏の感想・意見を取り入れて、さらに時代考証を積み重ねて第2報を続けて企画したいと思っている。

4. 取り上げた項目(品質管理を構成する要素)

取り上げる項目の選定にあたっては、客観性を重んじる姿勢から以下の資料を参考にし、学会誌編集委員会で決定した。

- ① 『クオリティマネジメント用語辞典』(吉澤正編集委員長)
- ② 品質経営度調査表
- ③ 日本品質奨励賞：TQM 奨励賞自己診断リスト

- ④ 『新版 品質保証ガイドブック』主要目次
- ⑤ 「品質月間テキスト」
- ⑥ 「品質」誌(Vol.36, No.4, 2006 特集「TQMのDNA」)
- ⑦ 「品質」誌(Vol.32, No.3, 2002 特集「TQM ツールボックス」)
- ⑧ 「品質」誌(Vol.39, No.1, 2009 特集「実務に役立つSQCの再普及」)

これらを参考に取り上げる項目、すなわち品質管理の構成要素を「◆3つのジャンル」に層別し、本企画では合計15項目とした。

—取り上げる項目—

- | | |
|----------|-----------|
| ◆システム系 | ◆概念系 |
| ① 方針管理 | ① 重点指向 |
| ② 日常管理 | |
| ③ トップ診断 | |
| ④ 機能別管理 | |
| ⑤ QCサークル | |
| ⑥ 品質保証体系 | ◆要素技術系 |
| ⑦ 初期流動管理 | ① QC七つ道具 |
| ⑧ 品質機能展開 | ② 新QC七つ道具 |
| ⑨ DR | ③ QCストーリー |
| ⑩ デミング賞 | |
| ⑪ 品質月間 | |

システム系では、QC工程表、管理項目一覧表、顧客満足度調査、概念系では、「PDCA」「後工程はお客様」「マーケットイン」「事実に基づく管理」など、要素技術系では重回帰分析、実験計画法、QC七つ道具・新QC七つ道具の中の各手法など、吟味を要して取り上げる項目も多くあらうと思われるが、紙面の都合上、また客観的視座からの事実の掘り起こしと時代考証をしっかりとしたいとの思いから、次の機会に譲りたい。

5. 結び

源流の一滴を見つめることにより、今、そこに流れている川自体が愛おしくなる。人とはそのようなものではないかと思う。同じく「品質管理の最初の一滴」をくみ取り知れば、理解の仕方も、使い方ももっと丁寧にかつ深く、なるのではないかと思う。